



文学×絵画

—文学作品の絵画化と画譜・絵手本—

カケル

「文の庫からアートを愛でる」

挿絵：『大成真写譜』巻一より 桜

東洋には古くから「詩画一致」という芸術における理想の境地がありました。「詩(文学)」と「画(絵画)」は切り離すことのできないものと認識され、詩をもとに絵を描いたり、絵をもとに詩を詠んだりすることもおこなわれました。

また、中国でうまれた絵の教科書「画譜」が日本にもたらされると、絵を志す人たちは本を持っている人のもとへ出向き、借りて絵を写すことで技術を習得していきました。

江戸時代に版本(木に彫って印刷した本)の出版が盛んになると、画譜は絵の手本としての用途から、絵そのものを楽しむものへ変化し、絵入り本として幅広い層に受容されていきました。

ここでは絵画にひそむ文学の世界と、絵画の発展や普及のために本が果たした役割を紹介します。

※ 本展示における作品名・人物名等は、新字体および一般に用いられる表記を採用した（当館OPACの書誌情報と表記に差異があります）

すぐれた絵とは — 詩と絵の関係性 —



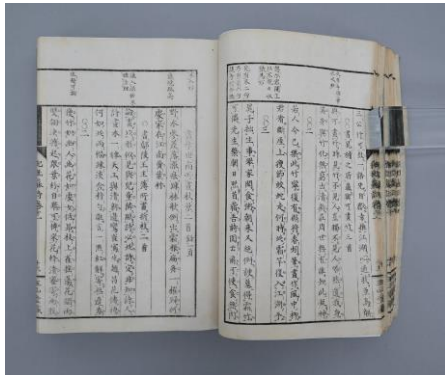
『大成写真譜』巻一より
雞兒腸即野菊

中国や日本の伝統的な絵画は、文学や書と深く関係しています。

絵の余白や巻末に、関連する詩や文章(画賛・題跋)を書き加えることで、詩と絵が互いに作用しあって芸術世界が構築されると考えられました。

絵は物のかたちを写すだけのものではなく、心を表現する手段のひとつとされたのです。

これらの絵画理論(画論)は、北宋時代(11世紀ごろ)に形作られました。



1 『蘇文忠公詩集挾粹』 卷十一

(宋)蘇軾；(清)查慎行[撰]
(江戸)平田虚舟, 文久3年[1863]

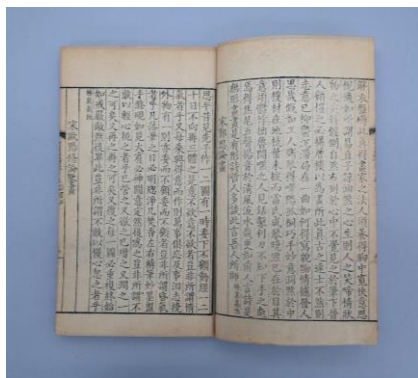
中国北宋時代の文人、蘇軾(蘇東坡1036～1101)の詩集。鄱陵に住む王主簿が描いた花木の絵についての詩には、「詩画本一律 (詩と絵はもとは同じもの)」と記され、のちの詩画論に多大な影響を与えた。本書は清代に編まれた本を幕末の日本で再刻刊行したもの。



2 『佩文齋書画譜』 卷八十一

(清)孫岳頒ほか[奉勅撰]
康熙47年[1708]序

清時代の康熙帝(1654～1722)の命で編纂された、書画に関する文献を網羅的に集めた本(全百巻)。蘇軾が詩書画にすぐれた唐時代の王維の絵について「詩中有画」「画中有詩」(詩の中に絵があり、絵の中に詩がある)と述べ、詩と絵の融合こそが理想であると説いている。



(パネル展示)『佩文齋書画譜』 卷十一

(清)孫岳頌ほか[奉勅撰]
康熙47年[1708]序

北宋時代の山水画家として知られる郭熙(1023～1085)が絵画の理論について述べた箇所には、「詩は無形画、画是有形詩(詩は形のない絵であり、絵は形のある詩である)」と記されている。

絵の世界を詩で表現する 詩の世界を絵で表現する

中国で絵に詩や文章を添えるのと同じように、平安時代の日本では屏風絵に和歌を書いた色紙が貼り付けられるなど、絵画と文学の融合が図られました。また一方で、和歌や物語の内容を絵で表すことも行われます。

識字率の上昇と出版文化の隆盛を背景に、江戸時代後期には多くの文学作品の絵入り本が出版されました。

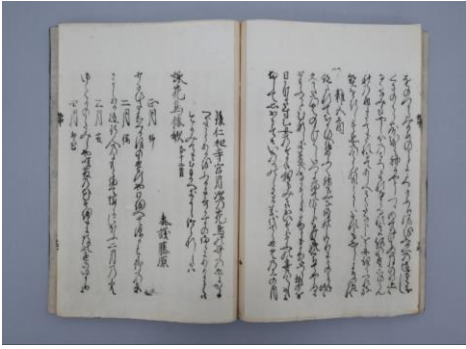
『芥子園画伝』竹譜より

3『古今和歌集』 上

(平安)紀友則ほか[奉勅撰]
(江戸)[出版年不詳]



平安初期に編纂された勅撰和歌集を江戸時代に版本として出版したもの。古今集には屏風に描かれた絵の主題に合わせて詠まれた歌「屏風歌」が数多く収められており、巻五には龍田川に紅葉が流れている屏風絵を見て詠まれた歌が収められている。このうち在原業平の歌は百人一首にも採用された。



4 『拾遺愚草』 中巻（『六家集』のうち）

（鎌倉）藤原定家[自撰], 建保4年[1216]
（江戸）[出版年不詳]

鎌倉時代の歌人 藤原定家の自撰和歌集を、近世初期に刊行したもの。このうち「詠花鳥倭歌各十二首」は、正月から十二月までの各月を代表する花と鳥について詠んだ歌(全二十四首)。後仁和寺宮(道助法親王)が定家に「月次の花鳥の絵」の題材となる和歌の制作を命じて詠まれた。

「詠花鳥和歌各十二首」(全二十四首)の題材

- 花** 正月－柳(やなぎ) 二月－桜(さくら) 三月－藤(ふじ)
四月－卯花(うのはな) 五月－盧橘(たちばな) 六月－常夏(なでしこ)
七月－女郎花(おみなえし) 八月－鹿鳴草(はぎ) 九月－薄(すすき)
十月－残菊(きく) 十一月－枇杷(びわ) 十二月－早梅(うめ)
- 鳥** 正月－鶯(うぐいす) 二月－雉(きじ) 三月－雲雀(ひばり)
四月－時鳥(ほととぎす) 五月－水鶏(くいな) 六月－鶺鴒(う)
七月－鶺鴒(くぐい) 八月－初雁(かり) 九月－鶺鴒(うずら)
十月－鶺鴒(つる) 十一月－千鳥(ちどり) 十二月－水鳥(おしどり)

「詠花鳥和歌各十二首」は、後仁和寺宮の求めに応じて藤原定家が詠んだもので、建保2年(1214)2月30日に仕上げて詠進したことが定家の日記『明月記』に記されています。江戸時代にはこれらの歌が季節を象徴するモチーフとして愛好され、一ヵ月ごとに分担して歌を書き写したり、歌を主題に絵が描かれたりしました。

奈良県立美術館で
「詠花鳥和歌各十二首」
を絵画化した作品が
展示されています
(4/5～5/18)



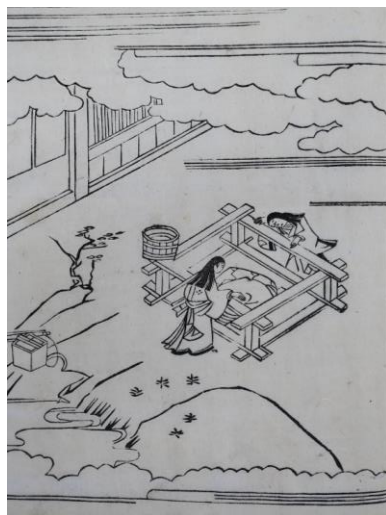
十二ヶ月花鳥図屏風 吉村孝敬

江戸時代・天保4年(1833) 奈良県立美術館蔵

5 『よみくせ入 伊勢物語』 上

(平安)[作者不詳]
(江戸)[出版年不詳]

平安時代に成立した「伊勢物語」を絵入りで表した江戸時代の版本。印象的な名場面を選んで絵にしている。



井戸のまわりでたけくらべ(背比べ)をして遊んでいた幼馴染の男女がやがて結ばれる「筒井筒」の物語は、後に能「井筒」となり、また秀吉所持の井戸茶碗「筒井筒」の由来になるなどした。

6 『大和名所図会』 卷六坤

(江戸)秋里籬島[著]；竹原信繁[画]
寛政3年[1791]



江戸時代に編纂された大和(奈良)の名所案内記。物語や古歌の舞台となった名勝地について、挿絵を添えて解説する。

吉野郡の巻には勝手神社社前で舞う静御前の姿が表され、ここが義経と別れて捕えられた静が舞った場所であることを説明している。

※なお『義経記』には、静は蔵王堂で捕えられたと記されている

7 『唐詩選画本』 初編卷二

(江戸) 橘石峯[書画]
天明8年[1788], 文化2年[1805]再刻



盛唐時代(8世紀)を代表する詩を選んで、明時代(17世紀初頭)に編纂した『唐詩選』は、江戸時代に大流行し、日本でさまざまな種類の解説書が出版された。『唐詩選画本』は漢詩の読み方や意味を仮名で表し、絵を添えて楽しく学べるよう工夫されている。

絵の教科書 — 画譜・絵手本 —

絵を学ぶ人のために挿絵を添えて描き方を解説したり、有名な作品を縮小模写して載せたりした本を「画譜」と呼びます。

中国の明時代末期(17世紀初頭)以降、版本の形で次々に出版され、日本にも舶載されて和刻本が出るほど人気を博しました。

これ以降の絵画には画譜の構図を参考にしたりと考えられるものもみられ、大きな反響があったことがうかがえます。

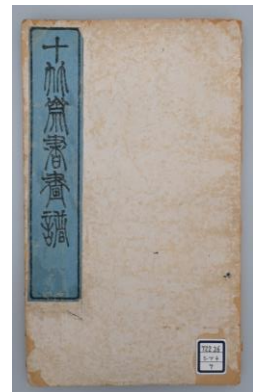


『芥子園画伝』菊譜より

8 『十竹齋書画譜』 書画譜・蘭譜

(明)胡正言[編]
(清)光緒5年[1879]版

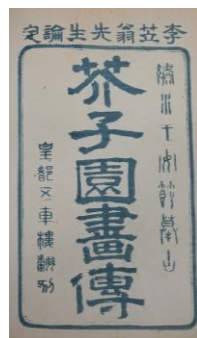
中国で明時代末期(17世紀前半)に成立した木版多色刷りの画譜を、清時代に重版刊行したもの。編者の胡正言が模写した先人の絵と、それについての題詩を交互に収める。絵の手本であるとともに、版画の技法が日本の浮世絵に影響を与えたことでも知られる。印刷した面を谷折りにして背に糊をつけた粘葉装と呼ばれる製本方法をとる。



9 『芥子園画伝』 二集菊譜(上・下)・四集草虫花卉譜(上・下)

(清)王蓍;王概;王臬[編]
(江戸)京都 菱屋孫兵衛, [出版年不詳]

中国清時代に刊行された木版多色刷りの画譜を、日本で翻刻出版したもの。初集の序文には康熙18年(1679)の刊記がある。その後まもなくの元禄年間(1688-1704)には日本に伝来し、和刻本が次々と出て絵手本として江戸時代の画人に大きな影響をもたらした。



10 『帝鑑図説』 二

(明)張居正[編], 万暦元年[1573]
(江戸)寛永4年[1627]



明時代(16世紀)に十歳で即位した万暦帝のために作られた帝王学の教科書。歴代皇帝の故事を絵入りで解説している。

日本では慶長11年(1606)に豊臣秀頼によって翻刻刊行されたのが最初で、為政者の嗜好を背景に何度も版を重ね、本書のように文章を和文にしたものも作られた。絵が狩野派絵師の粉本(手本)となったことで知られる。

11 『本朝画史』 四巻

(江戸)狩野永納[撰]
元禄6年[1693]



江戸前期に狩野山雪(1590~1651)の遺稿をもとに子の永納(1631~1697)が刊行した日本で最初の本格的な画論書で、絵師の小伝を載せる。この中で、中国皇帝の故事が題材となった『帝鑑図説』を最初に絵手本として写したのは、狩野山楽(1559~1635)であると記されている。



12『画史会要』 三・四

(江戸)大岡春朴[画]
寛延4年[1751]

狩野派の絵師 大岡春朴(1680～1763)による画譜。春朴は江戸中期の大坂画壇で活躍したが、多数の絵手本や画論の出版をおこなって絵画の普及にも努めた。

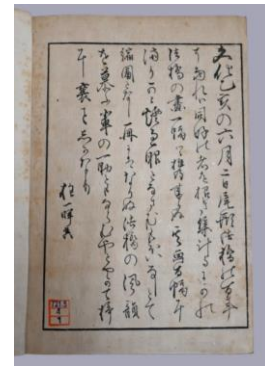
伊藤若冲(1716～1800)が春朴の画譜から学んだことが、近年指摘されている。

13『光琳百図』 上・下

(江戸)酒井抱一[模写・編]
文化12年[1815]跋-文政9年[1826]序

尾形光琳(1658～1716)の画風を敬愛した酒井抱一(1761～1828)が、光琳の百回忌にあわせて遺作展を開催し、その際に配られた私家版を増補して出版したもの。光琳の作品百点を抱一が縮小模写したもので、現在の展覧会図録に相当する。

のちに版を重ね、ヨーロッパにも伝わってジャポニズムに影響を与えるなど、光琳の画業を広く知らしめた。



14『大成真写譜』 巻一

(江戸)近藤有芳[画]
(明治)南原桂処, 明治21年[1888]



真写図とは対象をありのままに写しとった絵のことで、博物学の進展とともに多く描かれた。

本書は、江戸後期の京都の画家 近藤有芳が天保年間に写生したものを、門人の芝川又右衛門(大阪の唐物商)が主導して、後世の画人のためにと木版多色刷りで出版したもの。序文は藤澤南岳が記し、明治26年(1893)のシカゴ万博に出品された。

※会期中、頁をかえて展示します

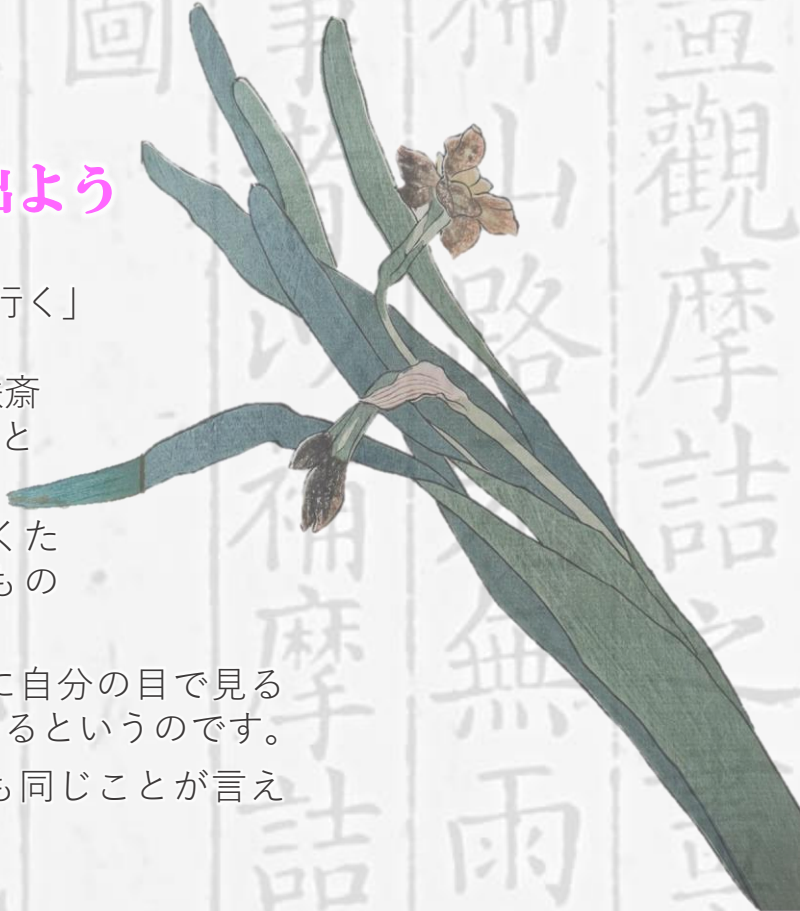
本を読もう、旅に出よう

「万巻の書を読み、万里の道を行く」

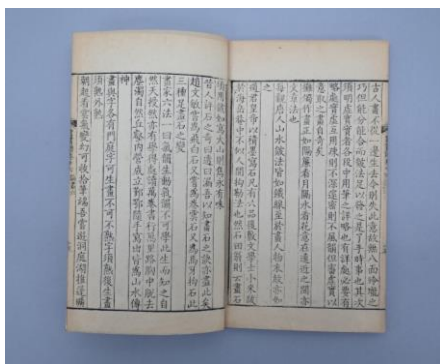
最後の文人として名高い富岡鉄斎(1837～1924)が座右の銘としたこととで有名な董其昌(1555～1636)のこのフレーズは、実は絵を描くための方法論として語られたものでした。

神羅万象について学び、さらに自分の目で見ることでよりよく描くことができるということです。

それは受け手である鑑賞者にも同じことが言えるのかもしれませんが。



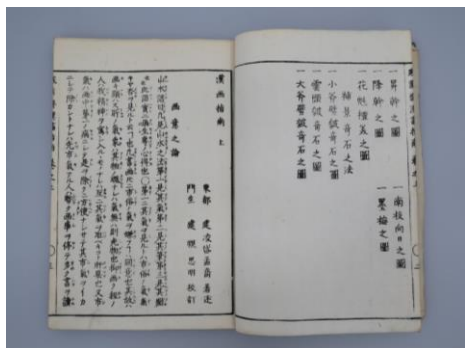
『大成写真譜』巻一より 水仙



15『佩文齋書畫譜』 卷十六

(清)孫岳頒ほか[奉勅撰]
康熙47年[1708]序

清時代に康熙帝の命で編纂された書画に関する文献を集めた叢書(全百巻)。明時代の文人董其昌(1555～1636)の画論には、絵を描くにあって大切な「気韻(高い精神性)」は生まれ持ったものであるが、「読萬巻書、行萬里路(書物から得た知識と自ら足を運ぶことで得た経験を積む)」ことで身につけることができるとある。



16『漢画指南』 乾

(江戸)建部綾足[著]; 建部鴻台[校訂]
安永8年[1779]

江戸中期の国学者・読本作家・画家の建部綾足(1719～1774)が著した絵の教則本。長崎で学んだ画論や技術的な描画例について、挿絵を添えて説明する。

絵にとって「気(精神性)」が大切であることを説き、そのため「市気(俗気)アル人ハ暫ク画事ヲ停テ多ク書ヲ読マシム」と、よりよく描くために本を読むことをすすめている。

【参考文献】

- ・ 宇佐美文理『「歴代名画記」〈気〉の芸術論』岩波書店 2010年
- ・ 宮崎法子『花鳥・山水画を読み解く—中国絵画の意味—』ちくま学芸文庫 2018年
- ・ 今道友信『美学の歴史』東京大学出版会 1984年
- ・ 坂崎坦『日本画の精神』ペリかん社 1995年
- ・ 中谷美風『四季折々の文人趣味—旅する二十四節季—』城山書店 2025年
- ・ 津枝謹爾『芝蘭遺芳』芝川又四郎, 1944
- ・ 静岡県立美術館編『物語のある絵画 日本画と古典文学の出会い』2005年
- ・ 大阪市立美術館編『うたものがたりのデザイン』2014年
- ・ 町田市立国際版画美術館『近世日本画と画譜・絵手本』1990年
- ・ 町田市立国際版画美術館『近世日本画と画譜・絵手本II』1990年
- ・ 井上さやか「文化の総体としての文学—季節表現と題画詠を例に—」（『万葉古代学研究所年報』10号 奈良県立万葉文化館編 2012年）
- ・ 張小綱「『唐詩選画本』考—詩題と画題について」（『金城学院大学論集人文科学編』11巻1号, 2014年）
- ・ 鶴田武良「『芥子園画伝』について—その成立と江戸画壇への影響」（『美術研究』283号 東京文化財研究所文化財情報資料部編 1973年）
- ・ 新江京子「若冲画と大岡春卜の画譜—版本学習と「物に即する」画の考察—」（『美術史』161号 美術史學會編 2006年）



『大成真写譜』巻一より鴨跖草